

地軸作戦

——金博士シリーズ・9——

海野十三

青空文庫

1

某^{ぼう}大^{たい}国^{こく}宰^{さい}相^{しやう}の特^{とく}使^しだ^と称^{しょう}する人^{じん}物^{ぶつ}が、このた^たび金^{きん}博^{はく}士^せの許^{もと}にや^もつてき^きた。

金^{きん}博^{はく}士^せは、当^{たう}時^じ香^{かう}港^{こう}の別^{べつ}荘^{しやう}に起^おき伏^ふししてゐるのである。

別^{べつ}荘^{しやう}と申^{まを}しても、こ^これは熱^あ海^{たみ}の海^{かい}岸^{がん}な^などによ^よくある竹^{ちやく}の垣^{かき}を結^ゆいめぐらして、湯^ゆ槽^{ぶね}の中^{なかつ}から垣^{かき}ごしに三^{さん}原^{はら}山^{やま}の噴^{ふん}煙^{えん}が^が見^みえよ
うとい^いうよ^ようなオ^おー
プ^ぷンな^なもの^{もの}では^{では}な^なく、例^{れい}によ^よつて香^{かう}港^{こう}の地^ち下^が
三^{さん}百^{ひやく}メ^めー
ト^とルに^に設^もけ^うら^られた^{れた}る穴^{あな}倉^{ぐら}の中^{なかつ}に^にそ^その別^{べつ}荘^{しやう}が^があ^ある^るので^{ので}あ

った。

某大国の特使閣下^{かつか}を、金博士の許へ案内したのは誰あろう、かくいうわたくしであつた。その当時、世界通信は、金博士が生死不明なること三十日に及び、まず死亡したものと噂^{うさ}されていたのである。従つて、博士に会いたくて焦^こげつきそうな焦^{しょうそう}燥^{そう}を感じていた某大国の特使閣下も、この噂に突き当られ、落胆^{らくたん}のあまり今にもぶつたおれそんな蒼^{あお}い顔色でもつて、上^{シャンハイ}海^{ハイ}の大路^{たいろ}小路^{しょうろ}をうろうろしていたのである。しかし特使閣下は、幸運だつた。わたくしという者に、ぱったり行き合つたからである。

「やあやあそこに渡らせられるは……」

と、わたくしがものをいいかけるうちにも、かの特使閣下はわ

たくしの姿を認め、手に持っていたステツキもウオツカの壇も、
鋪道の上に華々しく放り出して、ものも得いわず、いきなりわた
くしの小さい身体に抱きついたものである。それは大熊が郵
便函を抱えた恰好によく似ていたそう。通り合わせたわた
くしの妹が、後に語ったところによると……。

「何万ルーブルでも出すよ、君。金博士が生きているということ
を証明してくれればね」

と、特使閣下は、腕の中のわたくしを、ぎゅっぎゅつと締めつ
けながら、声をひきつらせていったことである。

「それは有難う。では九万ルーブル、いただきますよう、ネルス
キー」

「えっ、君は手を出したね。じゃあ、金博士はまだ生きていたんだね。ウラー、九万ルーブルはやすい。その倍を支払うよ。さあ、銀行まで来たまえ。どうせ君は、金を受取らなきや、喋りやすまいから……」

十八万ルーブルは、相当かさばって、ポケットに入りにくいものだと感じながら、わたくしはぼつぼつネルスキー特使閣下の質問に答えていた。

「……ねえ、金博士は、上海の邸で、時限爆弾にやられて死んだという噂なんだよ。いや、噂だけではない、わしも実地検証をしたが、博士が爆発のとき居たという場所は、すっかり土が挟まれてしまって大穴となっている。かりそめにも、博士の肉一

片^{ぺん}すら、そこに残っているとは思えないのじゃよ」

「あほらしい。金博士ともあろうものが、死んだりするものです
か」

「いくら金博士でも、身は木^{ぼく}石^{せき}ならずではないか」

「それはそうです。木石ならずですが、たとい爆弾をなげつけられようとも、決して死ぬものですか。おしえましょうか。あのとき博士は、〃これは時限爆弾だな、そしてもうすぐ爆発の時刻が来るな〃と感じたその刹那^{せつな}、博士は釦^{ボタン}を押した。すると博士は椅子ごと、奈落^{ならく}の底へガラガラと落ちていった。しかも博士の身体が通り抜けた後には、どんでんがえしで何十枚という鉄扉^{てつび}が穴をふさいだため、かの時限爆弾が炸裂^{さくれつ}したときには、博士は何十

枚という鉄扉の蔭にあつて安全この上なしであつたというのです」

「なーるほど、ふんふんふん」

「しかし博士の部屋は、あとかた跡形なくなつてしまつたので、博士はもうそこにはいられず、或るところへ移つた」

「それはどこかね。早く話してくれ」

「なにもかも教えましょう。香港にある博士の別荘ですよ、そこは」

「香港の別荘に金博士は健在か！ あーら嬉しや、これでもう大た
いがんじょうじゆ願成就だ」

という次第で、この特使閣下を、わたくしが案内して、博士のところへ連れていってやつたのである。この特使閣下は、自じこくさ国

宰相いしやうの面影おもかげに生きうつしで、影武者に最適なりとの評判高き
 御仁ごじんで、そのままの御面相でうろつかれては、宰相と間違えられ
 ていつなんどき面倒めんどうなことが発生するやも知れず、かくてはわ
 たくしが傍杖そばづえをくうおそれがあるので迷惑だから、道どう中ちゆうだ
 けを特に変装して貰うことにした。それで特使は、あの髭ひげを反対
 の方向へカイゼル髭にぴーんとひねり上げたものである。

「金博士よ、ぜひとも聴き入れてください。そうでないと、折^{せつか}角^{かく}わしが特使に立った甲斐^{かい}がないというものだ」

金博士は、後向きに椅子に腰をかけて、西瓜^{すいか}の種をポリポリ齧^{かじ}っている。さつきから何ひとつろくに返事をしない。

「ねえねえ金博士。博士は、わしが好んで特使に立ち、好んで味噌^{みそ}をつけるのだといわれるでしょうが、わしは自分の名声のために特使に立ったのではない。わが国の存亡^{そんぼう}の決まる日^{ふる}がすぐそこに見えているために、これが最後のチャンスと奮^{ふる}い起^たつて立ったのだ。どうぞ慫^{あわれ}みたまえ」

ネルスキーの熱演^{ねつえん}に拘^かわらず、金博士は依然として後向きになつて西瓜の種をぽりぽり噛みつつける。そこでネルスキーの顔色が、

また一段と赤くなつて来た。それは大焦燥だいしょうそうのしるしである。

「おお金博士、なぜ黙つて居られる。ふん、そうか。さつきから、わしがあれほどこどくどといつても返事をしないところをみると、さすがの金博士も、わが宰相が持ちだした問題があまりにむづかしいために、手出しが出来ないのだな。それに違ちがひない。それ故ゆゑ、ろくろく口もきかないのだ」

ネルスキーは、ついに勘忍袋の緒を切らしたという風に、あくどい罵言ばげんをはきはじめた。それでも金博士は、やはり西瓜の種を喰くらうことだけに口をうごかして、ネルスキーのためには応こたへないが、今度だけは博士の眼がぎよろりと光つたのは、多少ともネルスキーの言葉が博士の皮膚の下まで刺さしたものらしい。

「そうじゃないかね金博士。お前さんは、この広い世界に只一人しかいないオールマイティーの科学者だということであるが、へん、オールマイティーが聞いてあきれるよ。ダイヤのクイーンか、クラブのジャックぐらいのところだろう。ねえ、そうじゃないか。わが聯邦が今死守しているシベリア地方から、あの呪わしい雪と氷とを奪い去るくらいのが、お前さんに出来ないのかね。シベリアの各港を不凍港ふとうこうにして貰いたいというのだ。シベリアに棲すむのに、毛皮の外がい套とうなんか用なしにして呉くれというのだ。ペチカも不要、犬いぬ櫓そりなんかおかしくて誰が使うかという風に笑い話の出来るようにして貰いたいのだ。いや、もう何もいうまい。われわれが抱いていた夢はすべて消えた。科学の魔王金博士が健

在なる間は、われわれの望みはきつと実現されるものと思っていたが、そもそもそれが思い違いだった。なにが科学の魔王だ。シベリアから雪と氷とを追放するぐらいのことが出来ないで、へん、何が金博士さまだ」

「やろうと思えば、そんなことぐらい訳なしだ」

金博士が、西瓜を噛みくだく間に、ぽつんぽつんと言葉を挟^{はさ}んでいった。

「ええええええっ！」

と、ネルスキー特使は、金博士の言葉をきいて椅子からすべり落ちた。よほどおどろいたものと見える。

「あれっ、早^{はや}もう重心方向が変ったかな。この太っちよの特使閣

下が安定を欠^かいて椅子から滑り落ちるとは……」

金博士は、人のわるいことをいう。

ネルスキーは、腰のあたりを痛そうにさすりながら立ち上ったが、彼はすぐ金博士の手をとって押し戴^{いた}き、

「そういうこととは存ぜず、さきほどから失礼いたしました。今

更ながら、博士の学問の深く且^かつ大きいことについては驚^{きよう}嘆^{たん}

の外^{ほか}ありません。どうかわが国を救っていただきたい。九十九路^ろ

は尽^つき、ただ残る一路は金博士に依存する次第である。金博士よ、

乞^こう自愛せられよ」

有^{うちよう}頂^{てん}天になつたネルスキー特使は、まことに現金なごまをす

る。

「で、博士。それなら実際問題として、どういうことをなされます。これは宰相に報告する貴重なる材料となりますので、ぜひお話し置き願いまする」

「さつきから聞いていれば、わしが一口喋る間にお前さんは二十口も喋るね。ほっこくじん北国人には珍しいお喋りじゃ」

「これは御挨拶ですごあいさつ」

「まず何よりも決めて貰いたいのは報酬ほうしゅう問題じゃ。これが成功の暁には何を呉れますかな」

「ああ報酬ですか。これは申し遅れて、まことに申し訳なし。わが宰相から委任されている範囲内でもって、如何様なる巨額の報酬でもお支払いいたす。百ルーブル紙幣を、博士の目の高さまで積

んでもよろしいです」

「いや、ルーブル紙幣の名を聞いただけで、寒氣さむけがしてぶるぶると慄ふるえが出る。そんなものを紙幣で頂いただこうなど毛頭もうとう思つとらん」

「では何を……。あ、そうそう、カムチャツカでやつとります燻く製んせいの鰾にしんに燻製さけの鮭さけは、いかがさまで……」

「それだ。初めから、そういう匂いがしていた。燻製の本場ものはさぞうまいことじやろう。そつちから申込みの仕事は、その燻製が届いてから始めるから、仕事を早く始めて貰いたかったら、一日も早く現品げんぴんをわしのところへ届けなさい。では失礼」

というと、金博士の姿は忽然こつねんとしてその場から消えた。日本人に見せたら、これはきつと金博士が忍術を使ったと思うだろう

が、実はさにあらず、例の偏光硝子へんこうがらすで作った衝立ついたての中に、博士が入ったため、博士の方からはネルスキーの方が見えるが、ネルスキーの方からは博士が絶対に見えないのであつた。

3

シベリアから雪と氷とを永遠に追放して呉れさえすれば、今こんじ次戦せんに惨敗さんぱいをくらった政権が猛然と立ち直り得るといふのであつた。

金博士は、だいしぜんりよく大自然力を向うへ廻してのこの極めて困難なる
大事業をわずかの燻製の魚類ぎよるいを代償に簡単に引受けてしまった
のであった。

博士は一体成算があるのであろうか。

いや、これまでの博士のひとなりを知っているわれらは、今
度も博士が十分やりとげる自信があつて引受けたものと信ずる。
それにしても報酬があまりに粗末すぎるようでもあるが、元来がんらい
博士は黄金の価値について無頓著むとんちやくで、只ただマージナル・ユーティ
リティーの大なるものこそ欲ほしけれ、という極めて淡泊なる性格の
人だった。それはそれとして博士は今いかなる計画を胸に描いて
いるのであろうか。

髭の宰相の狙う最後の機会なるものは、シベリアから雪と氷を永遠に追払うことに繋つながれてある。

いかなる学者が聞いても、とたんに気絶するであろうと思われるこの難事を博士はとたんに胸のうちに解決をつけていたのだ。

「地軸ちじくを廻せば、そんなことは自由自在に出来るじゃないか」
地軸を廻すとは？

地球は地軸を中心として、反時計式に回転している。

その地軸は、二十三度半の傾斜けいしやをもち、太陽に対して一年を周期とする大きなかぶりを振っている。だから、温帯では春夏秋冬が、いい割合に訪れて生物を和やわらげてくれるが、赤道附近では一年中が夏であり、極地附近は一年中が氷雪ひょうせつに閉じこめられてい

る。シベリア一帯などもかなり極地的であつて、寒帯と呼ばれる地域が大部分を占めている。さてこそ、やむなくそこへ逃げこんで一命いちめいをもちこたえたのはいいが、後になってくしやみの連発に氣をくさらす者も出来てくる始末であつた。これを思えば、なるほど「シベリアから雪と氷とを永遠に追放せよ」との叫びも、彼らの衷心ちゆうしんからほとぼしり出いでた言葉であることが肯うなずかれもし、そして又、そのように途方とほうもない夢を画えがくことによつて僅かに自分を慰めなければならぬほど、窮乏きゆうぼうのどん底へ陥つてしまつたのだとも云える。

しかし、それは普通人の見方というものであつて、金博士に限つては（そうだ、なぜそれを早くやらないのか）といったげであ

る。

地軸を廻せば、雪と氷を追放することなんか訳なしだ、と博士は思っている。たとえば仮りに北極をワシントンへ持つていったとしたらどうであろうか。シベリアの氷雪はたちまち融け去り、さぞ御迷惑ごめいわくなこととは思うが、北米合衆国全土は美しき雪原せつげんと冰山とに化してしまい、凍結元祖屋とうけつがんそやさんだけに、有終ゆうしゅうの美をなしたと、枢軸国側すうじくこくがわから拍手喝采はくしゅかつさいを送られることになろうもしれぬのである。しかし、そのときには寒帯の方の国は、アメリカとは大反対に、躍りあがってよろこぶことであろう。

かようにして、金博士が地軸を廻せば、新北極や新南極に当たった土地の住民は、ぶうぶう云うか、感冒かんぼうに罹かつて死ぬるのが落

ちであろうが、寒帯から一躍温帯に変わったかのエスキモー人など、
どのように瞳を輝かして、あのあざらしの服を脱ぎ、にわか俄に咲き乱
れる百花に酔うであろうか。

いや、アメリカのことや、エスキモーのことなどはどうでもよ
ろしい。肝腎かんじんのシベリアの話を書き綴つづらねばなるまい。

4

さてもさてもここはシベリアの新モスクバである。

ネルスキー特使が泣き言をならべていったように、今この土地は吹雪ふぶきと巖げん氷びようとに閉じこめられている。

新クレムリン宮殿は、突とつ兀こつたる氷山の如く擬装ぎそうされてあつた。中ではペチカがしきりに燃えていて、どの室へやも、頭の痛くなるほど饅すえくさかつた。宰相さいしやう公室こうしつにおいては、例のネルスキー特使が、いかにも宰相らしく装よそおつて、大きな椅子に腰をかけていた。

そこへ運送うんそう相しやうクレメンスキーが呼ばれた。

「やれクレメンスキーか、待ち兼ねたぞ」と、ネルスキーは宰相そつくりの声で、「で、早速さつそくたずねるが、あの一件はどうした。たしかに先方へ届いたか」

「宰相閣下、あの一件と申しますと……」

「あの一件を忘れていろいろじゃ困る。ほら、あれじゃ、燻製くんせいのあれを、ほら中国の金博士に届けろといったあれだ。まだ届けてないんだな、こいつ奴め」

「いやいやいや、とんでもない。金博士のところへお届けする燻製十箱は、もう三日も前に向うへ着いています。そのことは、書類でもって御報告して置きました筈はずですが」

「なんだ三日前に届いたのか。書類というはよく途中で紛失するものだ。そういう重大なることは、口答こうどうでするように」

「申訳ありません。では失礼を」

クレメンスキーが、こそこそと去ると、ネルスキーはにたりと笑って、額の汗をふいた。

「燠製十箱で、シベリアが常夏とこなつの国になれば、電信柱も愕おどろいて花を咲かせるだろう。とにかくこれが実現されれば、やすい取引のレコードを作るといふものじゃ——しかし金博士は、交換条件のあれを何日頃いつごろから始めてくれるのだろうか」

と、ネルスキーは、金博士が一日も早く、シベリアの雪と氷とを追っ払ってくれることを祈るのだった。彼はまた額の汗をふいた。

「いやだなあ。今年は石炭が高いから節約して使えといっておいたのに、今日は又やけに燃もやし居るぞ。察さするところ、ペチカ委員め、気でも変になったと見える。一つ、呶どな鳴りつけてやろう」

ネルスキーは、電話機をもつて、ペチカ委員を呼び出した。

「おおペチカ委員部か。おいおい気でも変になったか、この石炭の高いというのに、こんなに燃して、一体国家経済をどうするつもりだ。わしかい。わしはネル、いや宰相じゃ」

ネルスキーは、宰相になりすまして、太い口髭をひっぱった。

「ああ宰相閣下。それはとんでもない御思い違いであります。私は石炭を無駄使いして居りませぬ。いや本当です。只今ペチカには一塊いっかいの石炭も燃えては居りませぬ。嘘だと思ひなら、こちらへ来て御覧下さるように……」

「なにを、うまいことを云つて、わしをごま化そうとしても、なかなかごま化されないぞ。たとい宰相閣下を——いや、わしは宰相閣下だが、ごま化されるものか。ペチカに一塊の石炭も入って

いないで、こんなにぽかぽかするものかい。わしの額からは、ぽたぽたと汗の玉が垂^たれてくるわ」

「ああ宰相閣下。そうお思いになるのは無理ではありません。今日は外気の気温の方が室内よりも高いのでありますぞ。窓をお開きになってみて下さい。途方もないいい陽気です」

「外はいい陽気？」

ネルスキーは、このとき初めて、或ることに気がついた。夙^とくに気がつくべかりしことを、今になってやっと気がついたのである。彼は思わず指の腹をこすつて、ぱちんという音をたて、

「あつ、そうか。いや、早いものじゃ。燻製の効果が、こうも早く出てくるとは思わなかった。いや偉大なものじゃ、豪^{えら}いものじ

や」

「これはこれは過分なる御褒めおほほの言葉で恐れ入ります。本員とい
たしましては……」

「莫迦ばか、今のはお前を褒めたのではない。はきちがえるな」

「はあ。それは御卑怯ごひきようというものです。私と電話でお話になっ
ていて、御褒めになったのですから、これはどうしても私の取しゅと
得くです。そうではありませんか、宰相閣下」

その返事の代りに電話機の掛けられたがちやりという音が、ペ
チカ委員の耳に入っただばかりであつた。彼は大きな白熊を取り逃
がしたように思ったが、しかしもう少しネルスキーの気のつき方
が遅ければ、既にゲペウの手に懸かつて始末されていたかもしれな

いのであつた。

5

ネルスキーは、廊下を飛ぶように駆けて、早速宰相室へいった。それは、今シベリアに不定期の春が来たことを告げて、香港^{ホンコ}会谈における彼の功績を宰相に認識せしめんがためであつた。

彼が宰相室の前までいったとき、その入口で、沢山の宮廷委員がモートルを担^{かつ}いだり、蛇管^{だかん}を持ったり、電纜^{でんらん}を曳^ひきずつたり

して、ごったがえしをしている有様を見て愕いた。

「ど、どうしたのかね、この体^{てい}たらくは……」

ネルスキーは、そのうちの一人の腕をとらえて質問を浴^{あび}せかけた。

「さあ、私は訳をよくは存知ませんがね、とにかく冷房装置をこ
こ一時間のうちに取りつけろという御命令です」

「冷房装置を？ ふふん、それは宰相閣下の御命令なのか」

「いや、私の受けたのは、気象委員部からです。これはここだけ
の話ですが、宰相閣下は暑さ負けがせられて、心臓に氷をあてて
おやすみ中だとの噂がありますよ」

「それはデマだろう。宰相閣下はあのとおり丈夫な方で……いや、

しかしこのような温気おんきには初めて遭あわれて、おまごつきかもしれない。おい、貴公は寒暖計を持っているか」

「私は持つて居りませんが、この壁にかかっています。これは自じ記き寒暖計かんなんけいですよ。ほう、只今せうし摂氏の二十七度です。暑いのも道理ですなあ」

「ほう、二十七度か。うん、シベリアがウクライナ以上の豊庫ほうこになる日が来たぞ」

「これをごらんなさい。全くふしぎなことがありますよ。今からたった十分前が摂氏二十度です。気温は急速に騰のぼりつつあります。おや、また騰りましたよ。いま正に摂氏の三十度。私はもう蒸し殺されそうです。失礼ですが上衣うわぎを脱がせて頂かねば、生命いのち

が保^もちません」

「なるほど、これは暑くて苦しい。わしも上衣を脱ごう。ついでにズボンも外^{はず}そう」

「ふう、暑い暑い。これは一体どういうわけですか。急に気温は騰るわ、雪は融けるわ、その水蒸気のせいで湿度百パーセント、なんという蒸し暑さでしょう」

「なるほどなるほど、宰相閣下が氷の塊を心臓の上におのせになるのも無理ではない」

「いつているとき、部屋の中からは、一人の役人が、頭から湯^ゆ気^げを立てて、まるで茹^うで蛸^{たこ}のような真赤な顔で飛び出してきた。

「おい、氷はないか。さつきまで全国どこでも有りあまった氷が、

今はどこへ電話をかけても無いそうじゃ。懸賞金を出すから、誰でも外へいって氷を持ってこい。宰相閣下の心臓が心配だ」

といっているところへ、これは廊下をばたばたと駆けて来た裸の役人がいた。

「たいへんたいへん、大洪水だ。だいこうずい。何しろ氷山も雪原も一度に

融けだしたんだから、町という町、防空壕という防空壕は水

浸^たしになり、水かさはどんどん殖^ふえていく。この新クレムリン

宮^{きゆう}も、あと三時間以内には水中に没するぞ。宰相閣下に、そう取

次いでください」

たいへんな騒ぎが、それからそれへと発展していった。宰相は、新クレムリン宮を後^{あと}にするに際して、委員の一人をしてネルスキ

―に叱責しつせきの言葉を伝達せしめられた。

“余よなんじは汝の行き過ぎを遺憾いかんに思うものである。シベリアを熱帯に

せよとは、申しつけなかったつもりである。早々そうそう香港ホンコンに赴おもむき

て、金博士に談判だんぱんし、シベリアを常春とこはるの国まで引きかえさせ

るべし。その代償だいしょうとして、あと燠製だくせいの五十箱や六十箱は支出

して苦しからず”

宰相の言葉をうけて、ネルスキーは不思議に銃殺の刑から免まぬか
れたことを悦よろこびつつ、直ちに香港おもむに赴いた。

金博士は、最早もはや香港にはいなかった。

博士はどこへいったのであろうか。助手に訊きくと、博士はアル
プス山中に行かれたとのことであつた。そこで、この助手君じょしゅくんを

おが
たお
拝み倒して、アルプス山中へ飛行機で案内して貰った。

博士は、白い天幕テントを張って、悠々と作業をつづけていた。

百トン戦車かと思うような巨大な鋼鉄こうてつの怪車輛かいしやりようが数百台、

博士の握るハンドル一つによって、電波操縦でギリギリと前進す

る。その怪車輛が崖がけにぶつかり、爆音をあげて崖はたちまち消

え失せる。その代り一本の茶褐色ちやかっしょくの煙がすーっと立ちのぼり、

轟々ごうごうたる音をたてて天空てんくうはるかに舞いあがっていく。その有

様は、竜巻たつまきの如くであつた。

これは人工竜巻とも名付くべきものである。博士は、この人工竜巻を何のために起しているか。それをいう前に、この人工竜巻がどんなものであるかということを説明する方が、順序であろう。

人工竜巻は、アルプス山を削り^{けず}とつた岩石が天空高く舞い上つていく姿である。山を削るには、かの怪車輛がある。この怪車輛は、能率三千パーセントと称せられた原子^{げんし}変換^{へんかん}エネルギーを利用した^{きじゆうどうりよくはつせい}起重動力発生機^きであつて、さてこそ連^{れん}山^{ざん}を削り、岩石を天空にとばす。しかもその人工竜巻には予め計算によつて^{ゆくえ}行方が定められてある。その行方は月世界^{げつせかい}である。地球から四千六百八十^{キロ}^だ籽距^だつたところに、地球と月との^{じゆうしん}重心^{しん}があるが、この重心を^{やや}稍^や通りすぎるに足るくらいのエネルギーを人工竜巻に与えることにより、あとは自然にアルプス^{くず}崩れ^{くず}の岩石が月世界に到達^{とうたつ}する。かくして地球がいくらかいびつになること、人工竜巻の生ずるモーメント、それと月世界の質量の増加することとが、

相あいかさな重り合つて、遂ついに地軸がかくも廻つたのであつた。

「ひどいですねえ、金博士」と、やつと博士をつかまえたネルスキーは、くどくどとシベリアの焦熱地獄化しょうねつじごくかのことを陳べて泣きついたが、博士は彼の言葉が耳に入らぬげであつた。博士は、いま始めている地軸変動の実験にすっかり興味を吸い込まれている態ていであつたが、それでもやがて一言ひとことだけ、ネルスキーに向つて云つたことである。

「シベリアから雪と氷とが追放されたことは、誰もが認めているじゃないか。それで約束の取引は立派に済すんでいる。あとの言いは贅ぜいたく沢たくというもんだ。吾儘わがままもの者めが！」

そういつたきり、もはや博士は缶詰のように口をつぐんでしま

つたことである。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻 宇宙戦隊」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1942（昭和17）年1月

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2009年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

地軸作戦

——金博士シリーズ・9——

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 海野十三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>